

「混乱の塔」

「……さて全地は同じ言語を持ち、同じ言葉を話していた。人々は東の方から移ってシナルの地に平地を見つけて、そこに住みついた。人々は互いにいった、さあ、煉瓦を造ってそれをよく焼こう。こうして彼らは石の代わりに煉瓦を、粘土の代わりに瀝青を用いるようになった。」

彼らはいった、さあ、われわれは一つの町を建て、その頂が天に達するような一つの塔をつくり、それによってわれわれの名を有名にしよう。全地のおもてに散らされるといけないから。

主は天から降りてこられ、人の子らが建てていた町を塔とをご覧になった。

主がいわれるのに、ご覧、彼らはみな同じ言語を持った一つの民である。そしてその始めた最初の仕事がこのありさまだ。いまに彼らの企てる何事も不可能なことはなくなるであろう。よし、われわれは降りていって、あそこで彼らの言葉を混乱させ、彼らの言葉が互いに通じないようにしよう。

主は彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは町を建てることを放棄した。それゆえその町の名を『混乱（バベル）』と呼ぶのである。というのはそこで主が全地の言葉を乱（バララル）し、またそこから主が彼らを全地のおもてに散らされたからである……」

「混乱の塔」 目次

序章	「遭遇」	001
第一章	「光の塔」	018
第二章	「能力」	057
第三章	「敵」	099
終章	「混乱の塔」	150

序章 「遭遇」

薄暗い明かりの中、小さな子供が膝を抱えて冷たい床の上に座っていた。深夜。普段ならとても起きていられる時刻ではないというのに、その鳶色の瞳は驚くほど冴えている。眠れそうにはなかった。肌を刺すような雰囲気と耳を痛めつける静寂、そしてなにより自らが投げこまれた異様な状況に、彼の神経は高ぶっていたのだ。

滑らかな鉄の床を引っかく指先に、厚い金属の装甲を通して鈍い振動が伝わってくる。断続的な揺れと力強いエンジン音につつまこまれながら、少年はあたかも巨大な生き物の腹の中にいるかのような不安を覚えていた。彼は、かつて見たこともないほど巨大な装甲車に閉じこめられていたのである。

一つの大部屋ほどもある荷台の中には、両親と妹の他、近所に住んでいる人たちが四〇人以上も集められていた。彼と同じく寝巻き姿の者が大半であり、皆、あてがわれた厚い柿色の毛布にくるまって小さくなっている。

少年は静かに顔を上げた。

（いったいあの人たちは、なにをするつもりなんだろう？ なんのために、ぼくたちを……）

その鳶色の視線の先には、彼らの眠りを妨げて最新鋭の牢獄に家族を連れこんだ張本人、ものものしい装甲服に身を固める六名の兵士たちの姿があった。四方の壁を背に、重たそうな銃を手にして虜囚を囲む戦士が四人。左

腕の装甲に仕込んだ端末を操って情報収集をしている軽装の男が一人。最後の一人はバイザーを上げたヘルメットの奥で目を閉じ、口髭を撫でつけている。

小さな瞳は知らず知らずのうちに口髭の男の動きに吸い寄せられていた。兜の奥から覗く表情はけっして若くはない。おそらく少年の父親よりも一回りは年上だろう。彼が他の兵士たちを指揮する立場にあることは明らかだった。装甲服のデザインや頭部を飾る赤い記章を見るまでもない。男の立ち居振舞いに潜む威厳と威圧感を、幼い瞳は敏感に感じ取っていたのだ。

「……ユーファー……」

不意に名前を呼ばれて子供は飛び上がった。小さな妹を腕の中で寝かしつけた母親が、疲れきった表情を息子に向けている。

「まだ起きていたの？ 早く寝なさい」

生気のない言葉が金属の壁の中で無機質に響く。まるでなにかをこらえているかのように、その声には抑揚がない。

針で一押しすれば感情が爆発してしまうのではないか……。そんな印象を抱いて、ユーファーは唇を噛んだ。母たちの苦しみの理由を知らないことがもどかしく、それを教えてもらえないことが悔しかった。

（どうしたんだろう？ 車に乗せられる前から、父さんと母さんの様子はおかしかった。……ぼくの知らないところでなにを聞かされたんだろう）

彼は疎外感を覚えていた。自分が積み重ねてきた八年という人生経験は、大人たちにとってなんの価値もないのだろうか？ 自分が子供であることをこんな形で思い知らされ、少年ははがゆかった。

「どうして、こんなところに閉じこめられてるの？ ……ぼく、帰りたいよ」

母親は小さく首を振る。

「……帰れないのよ……」

その一言は引き金だった。車内の空気が凍りついたことを感じ取って、ユ
ーファーは辺りを見回す。

若い女が一人泣いていた。

「帰りたい……。みんなを見捨てて、あたしだけが……」

「……黙れよ……」

連れ合いらしき男が壁に視線を向けたまま、無表情に声をかける。

「あなたは平気なの？ 家も友達も、あたしたちの思い出すべてが灰に……」

「静かにしろ！」

平手打ちの音が響き、女の言葉を遮った。

「なにをするのよ!？」

「俺たちは助かった……。いや、助けられたんだぞ。まず、彼らに捨っても
らったことに感謝したらどうだ？」

「あいつらの味方をするつもり？」

「彼らは俺たちを救ってくれた。……まさか忘れたとはいまい？」

頬を押さえて、女は目を見開く。

「それが答えるなの？ 自分さえ助かればそれでいいっていうの？ あなたが
そんなに薄情な人だとは思わなかった……」

降ろしてよ！ あたしはここで死ぬわ！ みんなを見捨てて一人だけ生き
ていくなんてできない！」

「だめだ。……こんないかたはしたくないが、俺たちは選ばれたんだぞ。
だから、生きつづけなければならぬんだ。選にもれた人たちの分までな……」

「どうして『選ば』なくちゃいけないの？ みんな救えばいいじゃない！
なんのための軍隊よ。国と国民を守るからこそ、税金で養われているんで
しょう？」

ヒステリックな叫びに気圧され、男の声は小さくなる。

「無茶をいうな。レスキュー活動は彼らの本職じゃないんだ」

「相手を殺すだけしか能がないなんて、ただの殺人鬼だわ。」

それに……。どうせあたしたちは利用されるのよ。軍の活動をアピールするため。私たちは努力しました。見てください、このかわいそうな人たちを……って」

「なぜ、軍に矛先を向けるんだ！ 俺たちが怨むべきは、ここに核攻撃を加える敵国の方だろう？」

（核攻撃!?）

ユーファーが血の気の引く音を感じ取ったと同時に、死に絶えていたかのような車内の静寂が打ち破られる。狂ったような叫び声、哀切に満ちた悲鳴、やり場のない怒声と嘆息、無力な泣き声、そして祈り……。

活気とは呼べない喧噪の中で、兵士の一人が銃を構えようとした。

「貴様ら、静かに……！」

「やめなさい。いまとなっては逆効果です」

軽装の諜報兵に押し止められ、兵士はヘルメットの奥から怒りの声を上げる。

「いまとなっては……？ なぜ、わざわざ間が悪くなってからいう!？」

「心外ですね。べつに雰囲気が悪くなるのを待っていたつもりなどありません。私は予言者などではないのですから。」

……私にわかるのはただ二つ。さきほどに比べて状況が悪くなったということと、あなたの軽はずみな行動が、事態をさらに悪化させるといふことだけです。与えられた情報を基に、最良のタイミングで最善の手を打ったつもりですが？」

言葉に詰まった部下を遮るように、口髭の隊長が割って入ってきた。

「セリム、おまえの力でなんとかならんのか？ 難しい注文だということはわかってるが、可能な限りパニックは避けたい」

名前を呼ばれた軽装の兵士は小さく首を振り、
「努力はしているんですが、一度に四〇人以上ともなると私ごときの力では……。皆をおとなしくさせたいというなら催眠ガスでも使った方が効果的だと思えますよ」

ため息まじりの言葉を聞き、銃を構えていた兵士が小さく声をもらす。

「……役立たずが……」

セリムと呼ばれた男のヘルメットが小さく跳ね上がった。

「役立たず？ 聞き捨てならない言葉ですね。私は道具でも奴隷でもないんです。

ご不満なら、ここで車を降りてもいいんですよ。私一人なら生きのびる自信もあります。むしろ足手まといはあなたたちの方なんですからね」

「貴様！」

「やめんか、シグラス！」

口髭の男の大喝に、話に耳をそばだてていた少年は小さく首をすくめる。

(いったい、なにを話しているんだろう……?)

ユーファーは心に浮かんだ違和感に眉をひそめていた。核攻撃にさらされようとするいま、彼らの会話はどこか状況にそぐわない。

「協力を請うたのはこちらの方だ。非礼をわびる、セリム・ザース」

頭を下げた隊長から目をそらして横を向くと、諜報兵はうつむき気味につぶやいた。

「いいですよ。こんな扱いには慣れていません。『天然』の私がどれだけ弱い存在なのかなど、きつと誰にも理解してはもらえないんでしょうね……」

言葉に刺があったことはこちらでも謝ります。……たしかに私はあなたた

ちに協力する義理も義務もありませんが、スベサリス研究室から連れ出していただいたことには感謝しているのです。力不足は否めないにしても、私なりにできうる限りの協力をしているつもりなんですよ」

ヘルメットの奥に隠れた顔からはなんの表情も読み取れないが、その言葉には哀しげともいらだたしげとも取れる不思議な響きが含まれていた。

弱々しい声が残ったユーファアの耳に、突然、甲高いアラームが突き刺さる。

「隊長……、あと五分です」

最後尾の壁を守る兵士の宣告が車内に冷たい風を呼んだ。

「危険区域は抜けたのか？」

「いえ、レッドエリアからは脱していますがイエローエリアは出ていません」

「グリーンまでの距離は？」

「五キロあります」

「……五キロ。判断の難しいところだな。毎時百キロで単純計算すれば……」

「ちようど三分ですね」

セリムの声だった。

「時間が足りない。車を止めるしかないか……」

口髭の男はバイザーに指を掛け、兜の奥からマイクを取り出した。

「〇二五六時、シユバイトより隊員各位に通達。これより一分後に車輛を停止させる。」

停車後、ガーダーは中央車輛のシエルター内に退避。ドライバーとナビゲーターおよびウォッチャーは護衛隊の移動を確認した後、運転席を対核防御モードに切り替えて待機せよ。シエルター化した後もウォッチャーは監視を怠るな。

報告、ヒューカンス小隊隊長シユバイト・ヒューカンス」

「ちょっと待て……」

マイクをしまおうとする口髭の男に声がかけられた。聞き覚えのある声色にユーファーはふりかえり、そこに自分の父親を見つける。

「イエローエリアというのは警戒領域という意味じゃないのか？ 安全が保証されていない場所で、なぜ停車する？」

「この車の前後には護衛がついている。核攻撃の前に彼らを回収しなければならぬ。シエルター機能を有している車輛はこれだけなのだ」

「……仲間の回収……だと？ そんな時間も調整できなかったのか？」

「作業の遅れなど、こちらに落ち度があったことは認める。だが、だからといって部下を見殺しにするわけにはゆかない。私はあなたたちを救出するよう命令を受けているが、同時に彼らを危険にさらしてはならないという義務も負っているのだ」

心に浮かんだ疑問に気を取られたユーファーは、気圧された父親が言葉を呑みこむ様子も見えていなかった。

（護衛？ ぼくたちを安全な場所へ連れていくだけなのに、どうしてそんなものが……。いったい、核攻撃以外のどんなものからぼくたちを守るといふんだらう）

「それで……、この車は安全なんだろうな？」

ユーファーの父親が低い声で確認する。

「保証はしかねる」

「なん……だと？」

期待していた答えを導き出すことができず、男は息子と同じ蒼色の瞳を大きく開いた。

「ここが、この車輛にとってイエローエリアであることに間違いはないのだ。

百パーセントの安全は保証できない。だが、九割以上の……」

「保障しろ！ 完璧な安全が保証できないというなら、車を止めるな！ ここには俺の子供がいるんだぞ！」

今度はシユバイトが絶句する番だった。

「……ユーファーとアズエニアの安全だけでも保証しろ」

「この対核シェルターは頑強だ。大丈夫、ミサイルが直撃でもしない限り……」

「そんな言葉が信用できるか！ だいたい、この車の中でおまえたちがそんな装甲服を着込んでいるのはどういう……こと……」

怒声は不意に途切れる。意識が暗転する寸前、ユーファーの父親はセリムの言葉を頭の奥で聞いていた。

「子供たちを心配する気持ちはよくわかりました。ですが、あなたの言葉は皆を不安にさせます。」

すこし眠っておちつきなさい。子供たちの安全については、私が責任を持ちますから」

「……と、父さん？」

目の前で起こったはずのできごとがユーファーには理解できなかった。セリムと呼ばれる軽装の兵士は、その手を首筋に当てただけで父親を眠らせたのである。

それは先入観や常識というフィルターが未完成な八歳の少年だからこそその驚きであったのかもしれない。諜報兵がなにも持っていなかったことは見ていた誰もが気付いていたが、その不可思議な事実をそのまま受け入れたのはユーファー一人だけだったのだ。

「あなた！」

違和感に縛られた少年を突き飛ばすように、娘を抱いた母親が駆け出す。

「待って、母さん。危ない！」

その言葉は、身体の奥に響く車の振動を察知して放たれたものだった。装甲車が急ブレーキをかけたことを彼は理解したのだ。丸く見開いた蒼色の瞳の中、母親は腕の中の子供をかばって頭から転倒する。

「母さん！」

急停止でバランスを崩した少年は、四肢で床をつかんだまま叫び声を上げる。人の壁とぎわめきに遮られ、ユーファアの目と耳は母親を追いかけることができなかった。

少女の泣き声が車内を貫いたのは、その直後である。

「アズエニア!?!」

眠りから覚めた妹の名を口にして少年は立ち上がった。人垣の隙間に、額から血を流して倒れこんだ母親の姿が見える。

「心配することはありません。気を失っただけです。念のため、応急処置をしておきましょう」

ざわついた車の中、セリムの言葉は耳よりもむしろ心に直接響いて少年の動揺をやわらかくつつみこむ。しかし、母親の傷を間近で見て泣きわめく妹に、その声は届いていないようだった。

「大丈夫だ。おまえの母親なら心配ない」

シグラスと呼ばれていた装甲兵が諜報兵の脇から現れ、アズエニアに手を伸ばす。小さな子供を気遣う心から取った行動だったが、その気持ちは裏目に出た。鉄の壁に囲まれた見知らぬ場所で両親は倒れて兄の姿も見えない。不安におびえる少女の瞳には、装甲をまとった兵士が恐怖をおおる鋼の怪物として映ったのだ。

悲鳴を上げてアズエニアは逃げ出す。彼女の行く手に立ちはだかるはずの扉が開いたのは、その瞬間だった。

「なに……!?!」

「〇二五七時、護衛任務を完了。これよりシエルターに避難します。戦闘車輜は破棄しました」

厚い扉の外には六人の装甲兵が立っていた。中に入ろうとするガードーたちの間を抜け、少女は外へと駆け出す。

「その子を捕まえろ！」

「だめです！ 強化外骨格のパワー・アシスト機能を切らなければ、子供を握りつぶしかねません！」

シユバイトの命令とセリムの叫びが耳に入り、ユーファーは腹の底が冷えるような感覚を覚えた。

「な……。待て！ 待つんだ、アズエニア！」

叫びながら、少年は弾かれたように飛び出す。

「馬……。鹿な……。なにを考えているんだ、あの子供たちは！ 核攻撃まであと三分もないんだぞ！」

絶句したシグラスを押し退け、諜報兵が戸口に立った。

「私が行きます。あの子たちを守ると、彼らの父親に約束しましたからね」

「セリム!？」

「二分だけ車輜の外殻を開けておいてください。それまでに帰ってきます」

隊長は首を振る。

「だめだ、危険すぎる！ われわれはおまえを失うわけにはゆかんだ！」

「大丈夫ですよ。万一間に合わなかったとしても、この装甲服は核攻撃にも耐えられる設計なんでしょう？ ……いや、たとえそうでなくても行かなければ。あの少年は尊敬に値する子供です。あれほど純粹で勇敢な心を見捨てるなど私にはできません」

「だが……」

「止めても無駄です。……いえ、止めさせはしませんからね」

それだけ残すと諜報兵は飛び出した。

「セリム！」

追いかけてようとする装甲兵を押し止め、シュバイトは苦しい表情で言葉を紡ぐ。

「やめろ、時間が惜しい。結局、彼に逆らうことなどできないのだ。

……ガードーはシエルター内で待機せよ。セリムの帰還と同時に対核封鎖する」

いい終わる寸前、隊長の身体が小さく跳ね上がった。不意に響いたコールベルに、彼は不吉な予兆を感じ取ったのだ。

『緊急連絡！ ウォッチャーよりリーダーへ。五時半の方角に動体反応あり！』

天井のスピーカーから、悲鳴まじりの声が走る。

「車輛後方か？ こちらの不手際で子供が二人飛び出した。いま、セリムが追っているが、それをリーダーが拾っているのだろう」

『違います。その三つとは別に、こちらに向かっている影があるんです！ 速度、毎時四〇キロ！ 大きさは約四メートル！』

「……セリム・ザースを呼び戻せ。大至急だ！」

『無理です。何度も呼びかけているのですが、コールサインが切られていて……』

「た……、隊長」

銃を構えた手に力を込めながら、シグラスは小さく震えていた。シュバイトは唇を強く噛む。

「核攻撃まで二分弱……。もはや、放棄した攻撃車輛に戻る時間すらまもなく。あいつのことは、あいつ自身に任せるしかあるまい。

……頼む。無事でいてくれ……」

隊長のつぶやきに重ねるように、スピーカーから悲鳴まじりの声の流れる。
『……影が……接触します！』

ウォッチャーの悲痛な報告と時を同じくして、ユーファーは妹の泣き声が突然途切れたことに気付いた。

「アズエニア……？ アズエニア！」

月明りだけが頼りの薄暗い山道で、少年の呼びかけに応えるものはない。

「……ア、アズエニア！」

その口からは震えたような声しか出てこなかった。寝巻き越しに伝わってくる深夜の冷気だけが原因ではない。静寂の山の中、ユーファーは得体の知れない恐怖を身体の内芯で感じ取っていたのである。

「返事をするんだ、アズエニア！ ここは危ないんだぞ！」

切羽詰まった声に応えて、頭上で茂みをかきわける音がした。飛び上がりかけた少年は、月明りに照らされて白く浮かんだ妹の顔に安堵する。

「降りられないのか？ さあ、早く戻ろう」

斜面に張りついて小さな崖をよじ登ると、少年は背伸びするようにして妹の細い足に手を伸ばした。

生暖かいものが腕を伝って顔に落ちる。手の中に残ったぬめりが冷たく濁いてゆく感触を不審と思う間もなく、なにかに肩を叩かれたユーファーはバランスを崩して斜面から転げ落ちた。

「いったいなにが……」

すりきれた寝巻きと身体を押さえながら顔を上げると、妹の姿が見当たらない。

「どうした？ どこだ、アズエニア……！」

叫びは声にならなかった。少年は探していたものを足元に見つけたのだ。

それは、なんの表情も浮かべず、ただうつろにまぶたを開いた妹の首である。細い首筋は生々しい傷口で引き裂かれ、血に濡れて乱れた長い髪が小さな顔に張りついていた。

ユーファーはなにかに引かれるように、ぬめついた両の手へゆっくりと視線を移す。月明りに赤く照らし出された血まみれの掌を見たとき、彼は初めて悲鳴を上げた。

「ア……、アズエニア！ アズエニア！」

狂ったような叫びをあざ笑う耳障りな響きが少年の背筋を駆け抜ける。歯をきしり合わせるようにも打ち鳴らすようにも聞こえる不快な音は崖の上から流れてきた。

力なく天を仰いだユーファーの蒼色の瞳が丸く開かれる。彼は、首を失った妹の死体の背後に「それ」を見つけたのだ。

「……あ……ふ……、……かふっ……」

ひきつったような悲鳴が喉の奥からもれてくる音を、ユーファーは他人事のように聞いていた。胸の奥に痛みが走り、逆流してきた胃液がのどを刺激する。心臓は激しく鼓動をくりかえしているのに血は凍りつき、全身がしびれるように熱い。

「それ」はゆっくりと動き、血の気を感じさせない青い単眼で少年を冷たく見下ろしてくる。ユーファーには逃げ出すことはもちろん、声を出すことすらできなかった。丸く緊張した瞳は魅入られたように「それ」に縛りつけられ、視線をそらすこともできない。

「た……すけ……」

ようやく少年が紡いだ言葉に呼応して、小さな崖の上で月光を背負って立つ影は、大鎌を思わせる巨大な前足を振りかざす。すべてが凍りついたユーファーの視界の中で、その動きは舞のようによどみなく美しかった。

(……光が……)

光輪を背負って立つ「それ」の姿を、少年は涙を浮かべたまなざしでただ見つめていた。太陽よりもはるかに強い輝きは、やがて影すら飲みこんで「それ」を覆いつくす。ユーファアの蒼色の瞳は不気味なシルエツトを捉えたまま焼きついた。

足元から重い音が響いてくる。真昼よりも明るくなった空に、巨大な雲がゆっくりと広がっていった。すこし離れたところからであれば、それは大きくカサを開いたキノコの形に見えたかもしれない。

烈風が木の葉を吹き飛ばして燃えさかる渦を形作り、樹林の形をした炎の彫刻を山に刻んでゆく。重い風が山を焼いている中、ユーファアは地面に打ちつけられた痛みも熱気の息苦しさも伝わっていないかのように、ただ震えていた。

「ユーファア・ライルド！」

焦土と化した山の中、名を呼ばれ、強く肩をつかまれた少年は金切り声を上げる。

「無事ですか？ ユーファア！」

セリムの言葉は恐怖に錯乱している子供の心を素通りして、むなしく響いた。蒼色だった瞳は暗くくすみ、大きく開いた視線はまるで焦点が合っていない。

諜報兵はヘルメットの奥で唇を噛む。

「目をやられたのか……。だが、まだ運がよかった。この崖が爆風と熱を防いでくれたなければ、いまごろは死体すら……。」

とにかく移動シエルターに戻りましょう。治療次第では、あるいはその目も……。」

男は少年の手を取って立ち上がらせようとする。差し出された腕を勢い

よく振りほどくと、ユーファーは頭を抱えてかがみこんだ。

「どうしました、なにをそんなに脅えているのです？　そういえば、探していた妹はど……こ……」

セリムの声は不意に途切れる。言葉を最後まで紡ぐ必要はなくなった。彼は問いかけた質問の答えをその目で見つけたのだ。

「この傷……、まさか!？」

一瞬後、諜報兵は無意識のうちに幅広のアーミーナイフを取り出し、辺りに目を配っていた。

「……いや……、おちつけ……」

脅えている自分を笑うように大きく息を吐き、男は続ける。

「怖がるな、セリム・ザース。いかにやつらといえども、あの核の炎の中では生きていられるわけもない。

……それにやつらと遭遇したとして、こんなナイフ一本でどうしようと……?」

火膨れを起こした生首のそばでユーファーが震えている。装甲兵は緊張を解き、ふたたび少年に手を差し出した。

「帰りましょう、ユーファー。妹の件は、あなたにはどうしようもなかったことです。せめて、彼女のためにおもいきり泣いてあげなさい。

そして忘れるんです。ここで見たもの、聞いたことのすべてを……。あれは、影ですらあなたの心をむしばみます。恐怖が消え去るその日まで、私が守ってあげますから……」

穏やかな言葉がゆっくりと耳に染み通り、やがてユーファーの頭が小さく落ちる。うなだれるようにもうつむいたようにも見えないしぐさの意味を悟って、兵士は少年の手を取った。

硬い装甲をつかんでユーファーは立ち上がる。死に包まれた森の中では、

その鋼の腕すら暖かかった。光を失った少年にとっては、それは唯一感じる
ことができる「生」だったのだ。

小さな手を引いて歩くセリムの足が三步ほど動き、不意に止まった。

「どう……したの？」

少年は、痛む瞳を謀報兵に向ける。

「そ……んな……」

それは返事ではなかった。セリムの耳にはユーファアの声など聞こえてな
かったのである。謀報兵の瞳は、崖の上に立つ影を捉えて大きく開かれてい
た。

「馬鹿……な。核の炎ですら、やつらを浄化することはできないというの
か？」

かすれたようなつぶやきを追いかけて、耳の奥に残っていた幻聴がよみが
えった。その甲殻の外皮がこすれ合う硬い音を払おうとして、少年は激しく
首を振る。しかし、そんな必死の思いもむなしく、恐怖と不快感とをおおる
悪夢の響きは徐々に大きくなっていった。

「聞こえる……。あの音が聞こえる」

「しゃべってはいけない！ やつに気付かれる」

脅える子供の声を聞きつけた謀報兵は「敵」から目を離すことなく鋭い命
令を放ったが、その言葉もユーファアには届かない。

「助けて、父さん……、母さん……！ 助けてよ、誰か！」

叫びに続いたのは、なにか重い物体が砂を噛む音だった。かすかに響いた
その音の意味を知らせるように、「あの音」が大きくなる。

（崖の上から飛び降りた!? ……嫌だ……。殺されたくない……）

暗闇の中、瞳に焼きついた異形の影だけが大きくなってゆく。大粒の雨が
その薄い肩を叩いたとき、ユーファアは悲鳴を上げた。

「来るな！ 来るなーっ！ あっちに行けーっ！」

「声を出さないで！ ユーファー！」

突然降り出した激しい雨音の中、セリムの叫びが悲鳴の色に染まる。

「助け……、神……様！」

生まれて初めて紡いだ祈りの言葉をかき消すように、風を切る刃物の音が少年の耳をくすぐった。

（しゃべるんじゃない！）

はがいじめにされたユーファーの喉に、冷たいナイフの感触と鋭い刺激が走る。喉から吹き出す血は、とても自分の身体から出てきたものとは思えないほど熱かった。むせかえるようなにおいが鼻を刺し、息が詰まる。

「どうして、ぼくを……」

少年はそう紡ぐつもりで口を動かしたが、そこからもれたのはあふれる血流と沼地で弾ける気泡のような音だけだった。

（ぼくは……死ぬんだ……）

脈打ったびに冷えてくる身体の中で、ただ喉だけが焼けるように熱い。不思議と恐怖はなかった。死を恐ろしく思う気持ちよりも、この体験が終わることを安堵する心の方が大きかったのかもしれない。

意識が途絶えるその瞬間、ユーファーはふと考えた。

（最後に聞いた叫び……。あれは、この人がいったのだろうか？ それとも、ぼくの心に浮かんだものだったのかな……？）